

著名人 クリスチャンの 家庭

第14回



アルベルト・シュヴァイツァー（1875-1965）の名前は、ノーベル平和賞の受賞者として、世界的に広く知られている。彼は、長年アフリカにおける医療宣教師として活躍した。それだけではなく、神学者や哲学者としても業績を残し、さらにはバッハのオルガン奏者として、ゲーテの研究者としても知られている。彼のこうした偉大で多彩な働きを助け支えたのが、妻のヘレーネであった。

シュヴァイツァーは、シュトラズブルグ大学の学生の頃、次のような決心をした。
「三十歳までは、学問と芸術に生きることを許されていると考えよう。それから後は、人間として直接人に奉仕する道を進もう」

彼が二十九歳、大学の講師をし、牧師をしていた時に、フランス領コンゴの北部で医師を求めるレポートを読み、即座に医師としてアフリカへ行く決心をしたのであった。そして三十歳になった彼は、大学の講師をしながら同じ大学の医学部の学生生活を送るという前代未聞の生活を六年間送ったのであった。

彼はこの医学生時代に、ヘレーネ・ブレスラウと知り合った。彼女の父親は、シュヴァイツァーと同じシュトラズブルグ大学の歴史学の教授であった。ヘレーネは、前から奉仕の仕事をしたいと強く願っていた。彼女はシュヴァイツァーと知り合い、彼の原稿の整理を手伝うようになった。医者としてアフリカへ行くという彼の計画に反対する人が多い中で、ヘレーネは誰よりも彼の良き理解者であり、すばらしい助言者であった。やがて二人は愛し合うようになり、結婚を考えるようになった。ヘレーネは、彼のアフリカ行きをぜひ成功させたいと思った。そこで彼女はシュヴァイツァーが医学部で学んでいる間、看護学校に入り、看護師の資格を取った。彼がアフリカで働く時良き助け手となるためであった。

一九一二年、二人は人々の祝福を受けて結婚した。シュヴァイツァーが三七歳、ヘレーネは三四歳であった。ある伝記はヘレーネについて、「彼女は生涯を通じて最上の妻であり、最大の協力者であり、助手であった。」と記している。まさに聖書が示す理想の妻の姿と言えよう。

さて結婚の翌年、様々な準備を経た彼らは、念願の地アフリカに向けて出発し、ランバレネに到着した。気候の厳しい熱帯の地であり、施設がまだ整わない中で、ほとんど患者が押し寄せ、シュヴァイツァーの活動は困難を極めた。

シュヴァイツァーと妻ヘレーネ（アフリカの人々に捧げた生涯） 文＝中村 敏

こうした中で、ヘレーネの働きは極めて大きなものであった。彼女は家政に心を配ったばかりではなく、消毒準備から麻酔までを行い、重病人を看護し、シュヴァイツァーを助けて献身的に働いた。

このような夫妻の働きの結果、ようやく病院経営が軌道に乗りにかけてきた一九一四年、第一次世界大戦が始まり、ドイツとフランスは敵国となった。フランス政府はドイツ国籍の夫妻を捕虜として扱い、病院の閉鎖を命じた。

二人は困難な収容所生活の中で、互いに支え合い助け合ってこの厳しい時期を乗り越えた。

一九一八年、戦争は終わり、彼らは懐かしいシュトラズブルグで生活を始めた。翌年長女のレーナが誕生した。父親と同じ誕生日に生まれたこの子は、シュヴァイツァー夫妻にとって、大きな喜びと慰めになった。

一九二四年、多くの準備を経て、二回目のアフリカ行きが計画された。しかしこの時は、最愛の妻ヘレーネは同行しなかった。彼女の健康がすぐれなかったことと、娘レーナを赤道直下の厳しい気候のもとで育てることが無理だったからである。

シュヴァイツァーにとって、やむを得ないことは言え、いつも彼の良き相談相手であり、助け手であった妻と別れることは実につらいことであった。しかしヘレーネは、次のように言っ

夫を励まし、送り出した。

「あなたは、一生を病気に苦しむアフリカの人たちにささげたのでしょ。どうか、私と娘のことは心配しないで、立派にお仕事を果たしてください」このヘレーネの言葉に励まされ、シュヴァイツァーは再びランバレネの土を踏み、医療活動を再開した。

一九二九年、三回目のアフリカ行きとなったシュヴァイツァーには、ヘレーネ夫人が同行した。彼のアフリカにおける働きはどんどん広がっていった。ただ残念なことに、ヘレーネ夫人の健康がすぐれず、彼女は本国への帰国を余儀なくされた。一九三九年、第二次世界大戦が始まった時、シュヴァイツァーは夫人と離れてランバレネにいた。戦争の影響が現れ、彼も弱気になっていった時、ヘレーネ夫人は病弱でありながら、アフリカにいる夫のもとに駆けつけたのであった。

一九五二年、シュヴァイツァーは長年の功績に対してノーベル平和賞を受賞した。これはまさに、ヘレーネ夫人と彼の二人に与えられたものであった。

一九五七年に一足先に召されたヘレーネも、その八年後に召されたシュヴァイツァーも、彼らが生涯をささげたランバレネの病院内の敷地に葬られた。二人は最後まで一緒であった



中村 敏(さとし)

1949年生まれ。新潟県出身。
日本伝道福音教団 新潟聖書教会牧師。
聖書神学舎、トリニティー神学校卒。
新潟聖書学院院長